

水保全

GRI 303-1

未来のいのちを守るために、節水効果の高い製品の提供などを通じて、製品ライフサイクル全体に渡り、水保全を進めています。

社会的課題

水は地球上のすべての動植物を育むためになくてはならないものです。また、清潔な暮らしを営むためにはすべての人々が衛生的な水を持続可能な状態で利用することが必要です。例えば日本では、家庭用水は洗浄を目的とするものが大部分を占めている※1といわれています。日本のご家庭で花王製品を使用する際に使用された水量は生活用水使用量の15%程度を占めている※2ことから、花王には水資源の保全に大きな社会的役割があると認識しています。

現在、多くの地域において局所的な大雨や洪水、慢性的な渇水やそれに伴う長期間の乾燥などの問題が顕在化していますが、今後は人口増加や気候変動により、ますます深刻化することが予想されています。

さらに、水は地域的な資源であることから、例えば、河川から同じ量の水を取水する場合でも、水資源が豊富な流域での取水と水ストレスの高い流域での取水では、水資源への影響は大きく異なります。そこで、花王が持続的に事業を行う上で、自社の水リスク低減と、地域環境・住民への配慮の双方が求められていることを認識しています。

※1 国土交通省水管理・国土保全局水資源部

※2 花王調べ

方針

花王製品のライフサイクルを通じた水の使用量は、

使用段階が90%程度、原材料工程が10%程度を占めています。そこで花王は、日本における消費財のトップメーカーとして、リーダーシップを発揮し、節水製品の積極的上市や行政・サプライヤー等とのエンゲージメントを図っています。

また、製品の開発から廃棄に至るすべての過程において、水に関する影響を最小化する活動を継続的にを行っています。

具体的には、以下の方針に沿って取り組みを進めています。

・環境宣言

モノづくりのプロセスだけでなく、使用段階でも花王独自の技術を活かし、環境に負荷を与えない製品をつくっていくこと。そして、原材料調達から廃棄まで、製品ライフサイクル全体で、さまざまなステークホルダーと一緒に実行できる、よりecoな方法を提案すると決意を表明

・環境・安全の基本理念と基本方針

製品・技術の開発にあたっては、製造から廃棄までの全段階で環境・安全についての評価を行い、環境負荷が小さい製品の提供に努めると表明

・花王レスポンシブル・ケア方針

環境負荷が小さく、消費者・顧客が安心して使用できる製品の技術開発とその提供に努める。事業活動において、節水等を含めた省資源を進めると共に、環境影響を継続的に改善すると宣言



環境・安全の基本理念と基本方針

<https://www.kao.com/jp/sustainability/klp/policy/environment-safety-policy/>

花王レスポンシブル・ケア方針

<https://www.kao.com/jp/sustainability/klp/policy/responsible-care-policy/>

花王 環境宣言

<https://www.kao.com/jp/sustainability/klp/policy/environmental-statement/>

戦略

リスクと機会

リスク

世界の大都市の住民が増え続け、都市の水関係インフラ能力が増え続ける住民の需要を満たすことができなくなると、住民は十分な水を使用できない、排水処理が適切になされない状況となり、住民の清潔・衛生を脅かします。また市水のコストアップがあると、工場運営コストが増加し利益減となるリスクがあります。さらに、工場においては、流域の環境・住民への配慮のある行動が求められており、この対応を行わないことで、地域住民などからのレピュテーションリスクが発生すると考えています。

気候変動の影響により、感染症による新たなリスクや機会が発生する可能性が高まります。2020年には、新型コロナウイルス感染症により、新たなリスク、機会が発生し、ライフサイクル、特に使用場面での水使用量が増加しました。このような機会には、花王が掲げる水削減

水保全

GRI 303-1

目標が達成できない可能性が高まり、目標未達に対するレピュテーションリスクの発生につながると考えています。洗浄意識が高まった状況で、湯水が発生すると、生活者が十分な洗浄行為ができなくなり、Kirei Lifestyleを維持することができなくなるリスクがあります。

機会

気候変動に関連する節水意識や清潔・衛生意識の高まりは、花王の事業に深く関係することから、大きな機会があると考えています。上記の状況を見据えて工場における水使用量削減を継続的に実施していることは、コストダウン・利益増にもつながると考えています。

節水意識の高まりは、洗濯や身体洗浄などの節水型製品の販売増加の機会となります。また、清潔・衛生意識の向上はすべての洗浄製品の売上増の機会となります。

戦略

水は、花王の製品を生産する上で重要な原材料であるだけでなく、水が必要な花王製品をご家庭で使用していただいていることから重要な役割を果たしていると認識しています。

水を使用する花王製品は可能な限り水使用量が少なくあるべきと考え、イノベーションに基づく節水製品の開発を継続しています。

生産における水使用量削減に向けたアプローチ

花王の各工場では、製品への配合や設備の洗浄・冷却などに水を利用しています。工場ごとに水使用量の削減目標を設け、3R (Reduce、Reuse、Recycle) の視点で水使用量削減や再利用に取り組んでいます。

Reduce

ボイラー用水や冷却用水の再使用回数を増やし使用量削減を図る取り組みを、ドイツ花王化学をはじめ複数の工場で行っています。

Reuse

雨水の緑地の散水などへの活用を、すみだ事業場や上海花王化学、ファティケミカル(マレーシア)などで行っています。

Recycle

使用後の蒸気を積極的に回収したり、プロセスで利用した水を浄化して再使用する活動を多くの工場で実施しています。

社会的インパクト

製品ライフサイクルにおけるすべての段階で水の利用効率を大幅に改善することをめざしています。

工場においては水使用量の削減目標を掲げ、継続的に取り組んでいます。これは工場が用水として利用する流域(河川やその水源)の保全につながると考えています。

地域住民の生活が水リスクに脅かされた際、地域に

根差したよき住民の一員として、積極的に地域住民への支援を行い、リスクを最小化します。

また、製品使用時の水使用量を削減できる節水製品を開発し、グローバルに展開することで、水使用量に制限がある地域においても、生活者が清潔な暮らしを続けることができると考えています。

生態系を保全する観点からも、花王グループ全拠点の水使用量目標を達成することで、工場が使用する水の取水源がある流域の淡水の持続可能性に寄与できると考えています。さらに、製品使用時と製品ライフサイクル全体の水使用量目標を達成することで、水道に関わるインフラ維持の負荷が低減され、生活者の水使用量が削減されることで上下水道料金負担の軽減にもつながります。

貢献するSDGs



事業インパクト

花王グループ全拠点の水使用量目標を達成することで、工場が使用する水の取水源がある流域の淡水の持続可能性や水道に関わるインフラ維持の負荷低減に寄与し、生態系の保全により影響を与えるだけではなく、

水保全

GRI 2-28, 303-1, 303-2

工場の持続可能性にも貢献し、安定した製品供給につながっていると考えています。製品使用時と製品ライフサイクル全体の水使用量目標を達成し、渇水地域や災害時に限らず、すべてのステークホルダーに、節水製品を使用することや節水への取り組みに共感していただくことは、商品選択につながり、売上増に貢献し、中期経営計画「K27」の達成に貢献するものと考えます。

※ 出典：水道事業の将来予測と経営改革（日本政策投資銀行、2017年）

ガバナンス

体制

取締役会の監督のもと、「水保全」に関するリスク管理は内部統制委員会、機会管理はESGコミッティで行っています。これら委員会の委員長は共に代表取締役社長執行役員が務めています。

「水保全」に関するリスク管理は、内部統制委員会（年2回開催）とその下部組織のリスク・危機管理委員会（年4回開催）で実施しています。委員長はコーポレート戦略部門担当役員が務めています。内部統制委員会のもと、政策・法規制や技術リスクなどを管理するレスポンシブル・ケア推進委員会と市場・評判、急性リスクなどを管理するリスク・危機管理委員会があり、これら委員会の委員長は共にコーポレート戦略部門担当役員が務めています。

レスポンシブル・ケア推進委員会とリスク・危機管理

委員会の事務局は、コーポレート戦略部門危機管理・RC推進部が務めています。

「水保全」に関する機会管理は、ESGコミッティ（年6回開催）で実施しています。外部有識者で構成されるESG外部アドバイザリーボードがESGコミッティの諮問に対する答申や提言を行い、社外の視点を経営に反映し、ESG推進会議がESG戦略を遂行しています。同コミッティの委員は事業、販売、R&D、SCMなどの責任者が務め、事業との一体運営を行っています。同コミッティとその下部組織のESG推進会議は、水をはじめとする環境課題や、社会、ガバナンスの課題について討議しています。同コミッティはその活動状況を年1回以上取締役会に報告し、取締役会の監督を受けています。

また、レスポンシブル・ケア活動に基づく社員教育において、全社員を対象に教育を実施しています。

ISO 14001を取得している工場・研究所においては、対象事業場で働く全社員を対象に教育を実施しています。

P25 Our ESG Vision and Strategy > ガバナンス

教育と浸透

製品ライフサイクルにおける水使用量の90%程度が使用段階であることから、節水に貢献する製品設計を行うことが重要です。そのため、社員に対し教育の機会を多く設けています。

花王社員が工場の節水活動や、節水製品の研究開発

を担うにあたり、さまざまな機会を通じて水に関わる知識を得、自主的・積極的に水保全に対する活動に取り組むことが花王の活動のレベルアップにつながります。

また、花王社員は、製品を開発・提供する立場のみならず、会社を離れると一生活者であり、製品を選択する側となります。従って、社員も生活者として、水保全に取り組むことが必要です。Kirei Lifestyle Planを推進するための必須知識が学べるeラーニングプログラムを日英で作成しており、国内外の社員に「水保全」をテーマにしたコンテンツを2021年より配信しています。

ステークホルダーとの協働

生活者がKirei Lifestyleを実現するために、花王はさまざまなステークホルダーとの相互理解を深め、協働していくことが必要と認識しています。

生産段階における水使用は地域社会に影響を与えるため、コミュニケーション活動が欠かせません。多くの工場では毎年環境報告書を作成し、地域の住民とコミュニケーションをとっています。

各国・地域が抱える水問題を解決していくために、政府や自治体、NPOなどが進める活動に積極的に参加しています。事業領域や学閥領域の枠を超え、産学公民等のさまざまな知恵を集めて、未来の洗濯や洗浄について、議論や提案をしていく未来洗浄研究会を主導しています。中国においては節水キャンペーンを実施、また日本においては環境省Water Projectに参画しています。

水保全

GRI 303-1, 303-2, 303-3, 303-5

水リスクが高いセクターに属するサプライヤーには、自らの水管理レベルの向上を理解し、行動をしていただく必要があります。毎年CDPサプライチェーンプログラムを通じ、回答を依頼しています。そして、各サプライヤーの活動をレベルアップしていただくよう、花王による評価結果をフィードバックしています。

Kirei Lifestyleの実現のためには生活者の行動変容が必要です。ミュージアムや工場の見学を通じて、すべての生活者が日々使用する水を題材に、Kirei Lifestyleを考えるきっかけを提供しています。例えばエコラボミュージアムでは、生活用水の量を実感できる展示をしています。

リスク管理

リスクと機会のアセスメントのプロセスについては、コーポレート戦略部門が花王で想定されるリスクと機会を検討し、社内での取り組みを実施する各部署担当者や社外有識者の意見を踏まえてリスクと機会のアセスメントを実施し、それぞれ内部統制委員会とESGコミティで承認を受けています。

花王として、リスク・危機管理委員会事務局(危機管理・RC推進部)から各部門、子会社に対して、網羅的及び特定のテーマに関するリスク調査が実施され、重要リスクの洗い出しと対応策の見直しが進められています。基本的には、主管部門が中心となり対応していますが、組織横断的なリスクや共通するリスクについては、関

係部門と連携して対応の強化を図り、必要に応じてコーポレートリスクテーマとして対応が行われています。

P40 Our ESG Vision and Strategy > リスク管理

指標と目標

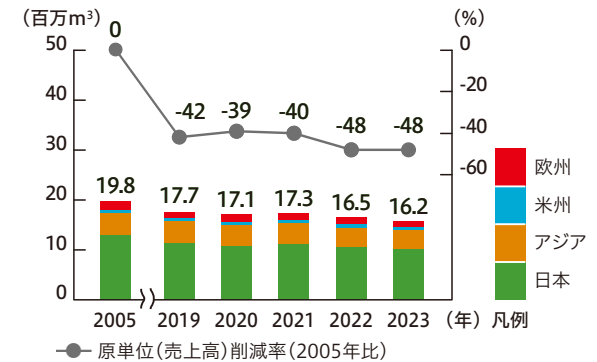
中長期目標と2023年実績

2030年長期目標

項目	対象範囲	2030年目標
水使用量 (売上高原単位)	花王グループ全拠点	45%削減(2005年比)
	花王グループ製品ライフサイクル全体	10%削減(2017年比)

花王グループ各拠点においては生産、研究、事業すべての活動において節水を日々推進しています。製品ライフサイクル全体で節水型製品を提供すると共に、ステークホルダーの皆さまに節水の価値を伝えていきます。

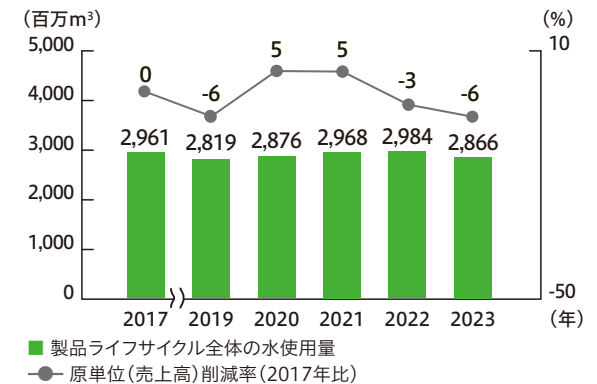
水使用量(取水量)の推移 ☒ (全拠点)



※ 集計対象は2005年は花王グループ全生産拠点、日本国内の非生産拠点が対象。2016年以降はすべての非生産拠点を含みます。

※ 保証対象は水使用量(取水量)

製品ライフサイクル全体の水使用量の推移 ☒ (花王グループ)



※ 主に日本国内及び海外で販売した製品単位数量当たりの製品ライフサイクル(ただし、自社グループの生産工程、物流工程を除く)を通じた水使用量に当該製品の年間の売上数量を乗じて算出した値に、自社グループの生産工程、物流工程を通じた水使用量の実績値を合算したものです。ただし、産業向け製品は、調達に関する水使用量は含みませんが、使用及び廃棄に関する水使用量は含んでいません。

※ 保証対象は水使用量及び原単位(売上高)削減率

水保全

GRI 303-1, 303-2, 303-3, 303-4, 303-5, 308-2

花王の製品ライフサイクルにおける水使用量の割合

水源別取水量の推移(百万m³)※1 ☒ (全拠点)

	2020年	2021年	2022年	2023年
地表水	0	0	0	0
半塩水・海水	0	0	0	0
雨水	0	0	0	0
地下水(再生可能)	5.1	5.4	5.4	5.5
地下水(再生不可能)	0	0	0	0
油汚染水・プロセス水	0	0	0	0
市水	11.8	11.9	11.1	10.7
他の組織からの排水	0.10	0.01	0.03	0.05

※1 集計対象拠点:花王グループ全拠点

放流先別排水量の推移(百万m³)※2 ☒ (全拠点)

	2020年	2021年	2022年	2023年
河川・湖沼	2.7	2.9	2.8	3.1
半塩水取水・海	5.7	5.7	5.0	4.9
地下水	0.0	0.0	0.0	0.0
下水道	2.8	2.9	2.7	2.5
他の組織への排水	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	11.2	11.4	10.5	10.5

※2 集計対象拠点:花王グループ全拠点

P120 脱炭素 > 指標と目標 > CDPによる評価

2023年実績に対する考察

水使用量(全拠点)は、前年より少ない16.2百万m³で、原単位(売上高)削減率は昨年と同等の48%となり、2023年目標の42%を大きく上回る削減を達成しました。また、取水リスクのある生産拠点の水使用量は2.9百万m³でした。

製品ライフサイクル全体の水使用量(花王グループ)は、前年より118百万m³減少しました。原単位(売上高)削減率は2017年比で6ポイントの減少になりました。

すすぎ1回の衣料用洗剤などの節水製品の置き換わりにより、製品ライフサイクル全体の水使用量は減少しました。原材料価格の高騰による価格転嫁分の売上増の影響もあり、水使用量原単位も減少しました。

課題は使用段階での水使用量の低減です。節水型製品のさらなる拡大を進めていきます。

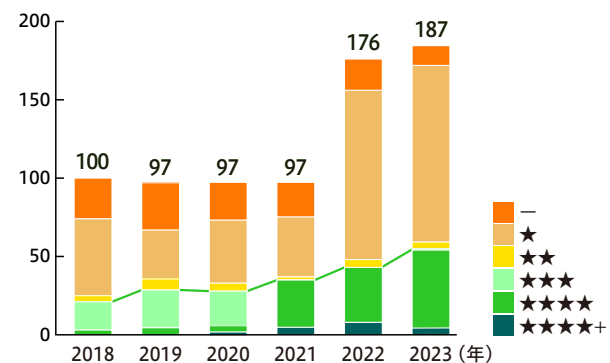
主な取り組み

原材料購入における取り組み

2015年、CDPサプライチェーンプログラムに参加し、水リスクが高いセクターに属するサプライヤーに対して、自らの水管理レベルの向上を促しています。具体的には、CDPの質問書に回答いただき、花王独自の評価法によりサプライヤーの水管理状況等を評価し、結果をフィードバックしています。

2023年の調査の結果、「★★★」以上の評価となったサプライヤーは前年に比べ12社増加し、サプライヤーの活動レベルが向上していることがわかりました。一方、回答企業を11社増やしたことで「★」となった企業が5社増加しました。今後、「★★★」以上の評価を取得できるようエンゲージメントを進めていきます。

サプライヤーの活動レベル(水)



水保全

GRI 303-1, 303-2

生産における取り組み

3Rの取り組みの例

会社名	内容
上海花王化学	一部の製品の反応プロセスで使用した水を、別の製品の製造プロセスに再利用し、水使用量を削減
花王(ベトナム)	タンクの洗浄・滅菌プロセスにスプレーを利用した方式を導入し、水や蒸気を削減
花王インダストリアル(タイランド)	冷却水のオーバーフローを冷却水プールに戻して、水使用の無駄を削減
キミ花王(メキシコ)	地元自治体と、自治体の浄水設備から多くの再生水を受け入れる協定を締結。逆浸透膜による下水の有効利用により、購入した再生水をよりきれいな水にし、生産に使わない残りの水を市の施設を介して川に放流することで、地域の水循環に貢献

生産拠点の水リスク調査

気候変動による降水量の変化や海面水位の上昇は世界で均一ではなく、地域差が大きいことが報告されています。将来の年平均降水量は、RCP8.5モデルの2080年から2100年の期間で、高緯度域及び太平洋赤道域では増加、中緯度や亜熱帯の乾燥地域では減少すると報告され、海面水位上昇量は同モデル・期間において世界平均では0.71mですが、その幅は0.51mから0.92mと大幅に異なっています。

そこで花王は、事業場・工場・物流拠点を対象に、中長期を含めた水リスクの評価を行いました。

一次スクリーニングとして、立地条件の把握(主に洪水／高潮の観点で近傍の河川、海岸線、標高等の確認)、既存ツールによる確認(Aqueduct、ハザードマップな

ど)、過去事例の確認(過去の被害その他自然災害の有無)を行いました。次いで、一次スクリーニングで抽出された拠点について、気候モデルで豪雨、少雨、高潮のリスクを現在気候(1951～2011年)と比較しました。

結果、少雨の発生頻度は全拠点において現在気候と同程度であること、豪雨と高潮の発生頻度は、現在気候より増加する拠点があること、浸水の被害は花王のこれまでの想定とほぼ同一であることがわかりました。

さらに渇水の高リスクと見込まれる複数拠点を対象に、流域における水資源量リスクの定量評価をCBWT※1の手法に基づき実施しました。結果、本評価法が有効であることを確認できました。順次定量評価を継続しており、リスクが高くなる工場が複数あることを確認しました。今後評価の対象拠点を拡大し、リスクが顕在化しないような予防措置、顕在化した時の対策を検討していきます。

※1 Context-Based Water Targets:流域の状態を考慮した水関連目標設定のためのガイド

使用における取り組み

使用段階の水使用量が全ライフサイクルでの水使用量の90%程度を占めていることから、節水型製品の提供とその使用方法のコミュニケーションに取り組んでいます。

花王は、すすぎ1回で十分な洗濯が可能な衣料用洗剤「アタックNeo」を2009年に日本で発売。2019年には、

洗浄力・消臭力・洗剤残りゼロを両立した「アタックZERO」を発売しました。水使用量の少ないドラム式洗濯機専用の製品においてもすすぎ1回でのお洗濯が可能です。スティック形状の衣料用洗剤「アタックZEROパーフェクトスティック」では、粉末洗剤においてもすすぎ1回を可能にしました。すすぎ1回を可能にする衣料用洗剤は、日本、台湾、香港で提供しています。

花王は、泡に着目した本質研究により、ほかの製品群においてもすすぎ水を削減することに成功しています。2010年には従来品よりすすぎ水を20%減らすことができる「メリットシャンプー」を、2014年にはすすぎ水を20%減らすことができる食器用洗剤「キュキュット」を、2015年にはすすぎ水を10%減らすことができる浴室用洗剤「バスマジックリン」などを上市しました。

節水方法についても、さまざまなアプローチで生活者に伝えています。例えば、より少ない水で洗髪できる「エコシャンプー術」を開発し、生活者への啓発も行っています。節水型製品の提供と同時に、節水方法をお伝えしていくことは、「環境宣言」のスローガン“いっしょにeco”をまさに具現化した取り組みです。

“いっしょにeco”のもとで推進する教育と活動

社員

・花王エコラボミュージアムにおいて社員向け説明会を実施(新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、社員向け「オンライン見学会」を実施)

水保全

GRI 303-1

お客さま

- ・花王エコラボミュージアムで節水に関する展示を実施

ビジネスパートナー

- ・重要サプライヤーをお招きしたベンダーサミット
- ・CDP質問書への回答を要請

地域社会

- ・多くの工場で毎年環境報告書を作成し、地域の住民とコミュニケーション

行政／自治体

- ・中国において節水キャンペーンを実施
- ・日本において環境省 Water Project に参加

中国清潔・節水全国運動—節水キャンペーン10年連続実施

P82

サステナブルなライフスタイルの推進 > よきモノづくりと活動提案、ステークホルダーとの協働 > 中国清潔・節水キャンペーン

社員の声

Kirei Lifestyleの実現に自然からのサステナブルな水源である雨を活用する

ヘルランバン ステファニ

花王株式会社
ESG 部門
財団活動推進部



日常生活において、一般的には洗浄プロセスの最後にすすぎの工程が必要です。そのため、ものをきれいにするには、すすぎ用の水もきれいでなければなりません。私は小さい頃から、故郷のジャカルタで、川の水などの汚れている水で洗濯している人々の姿をよく見かけ、「このような水で洗濯してきれいになるのだろうか」とずっ

と心残りを抱えてきました。

インドネシアは赤道付近に位置し、水資源が豊富にもかかわらず、きれいな水が不足しているのは非常に皮肉なことです。この水問題の影響で、高額な生活水を購入したり、遠いところまで水を汲みに行ったり、健康被害を感じながらも我慢したり、生活の中で何らかの犠牲を払わなければならない状況です。

そこで、将来的には、自然からのサステナブルな水源である雨を集めて浄化し、切実な水問題を抱えている方々にきれいな水を届けたいと考えています。そうすることで、生活者の洗浄環境もよくなり、全体的なQOLが向上し、ひとりも取り残さずKirei Lifestyleの輪を実現していきたいと思います。

水保全

ステークホルダー・エンゲージメント

並木 崇 氏

WWF ジャパン 淡水グループ長



花王は、製品の水使用量の大部分を占めている使用段階での取り組みを重要視し、商品開発の側面から水保全を進めている。さらに、地域によって同じ取水でも水資源への影響が異なることを踏まえ、水ストレスの高い流域での取水に注目している点は評価に値すると考える。

そうした花王に今後期待したいことは、すでに実施されている「水は地域的な資源である」という認識のもと行われた調査や検討結果を、水保全目標に反映することである。

それにあたり、検討いただきたいポイントが2つある。1つ目は原材料の調達地を調査範囲に含めること。2つ目は渇水だけに着目しないこと、である。

1つ目については、まず製品の原材料となる特定の農作物等の生産地域(海外を含む)を含めて、どれくらいの水リスクが存在するのか把握する必要がある。そして、水リスクを概観し、優先度を明確にした取り組みを、水保全目標達成の戦略に組み込むことが重要である。海外を含む原材料の調達地を含めることで、トレーサビリティの確保には難しさが伴うが、花王にはぜひ、こうしたリスク調査を進め、結果を水保全の戦略に反映してほしい。

2つ目については、水リスクは渇水がとくに注目されるが、ほかのリスクにも目を向ける必要がある。例えば、「汚染」は、渇水の傾向がある地域では、相対的に汚染濃度が高まるなど、状態が深刻化しやすい。目標の策定には、水リスクの多面性にも着目し、目標に反映することも重要と考える。

またさらに、「流域」の観点を踏まえた、水資源の管理や汚染対策、淡水生態系保全などの現場での取り組みの推進も期待したい。ビジネスに必要な健全な水をもたらすのは、その上流や下流域までを含めた水のつながりや自然環境にほかならない。これを育む「流域」全体の中から、取り組みの現場を特定し、企業や行政、科学者やNGO、地域コミュニティと共に、さまざまな水リスクの解決が求められている。

こうした多様なステークホルダーとの流域における連携「コレクティブアクション(協同活動)」は、欧米企業を中心に広がりを見せつつあり、流域の貴重な自然環境の保全にも貢献する、水保全の重要な要素となっている。

花王と花王製品にとって、また自然にとって重要な流域で、現場の取り組みを進めてもらうことを期待したい。